

第9章

事後検証（1） 観察者視点の4ヶ月間の変化

1. 観察者視点の考察の必要性

ここでもう一つ、関与観察者が関わり続ける中で起こる観察者視点の変容について考察していく必要がある。場に関与する者同士の相互的な営みが継時的に展開するワークショップ実践においては、第6章「動きの中にあるワークショップを捉える視点」で提起したように、その動的展開を文節化・断片化するのではなく、かかわり合う接面のアクチュアリティを含んだ体験を可能な限り全体性をもって描き出す必要があった。実際のワークショップで起こる出来事は多元的なリアリティによって構成されているが、客観的な観察という無関与的なかかわりから見えるものや、事象の網羅的で一般化された理解ではなく、「相手に人として向き合い、場に臨み、関与しながらの観察において手応えをもって現れてくる様相」（南, 2004, p. 20）という、「まるごと」と「あるがまま」の体験の把握と考察が重要であった。ここまでの事例研究は筆者（観察者）の間主観的な感受認識を軸にした体験理解であり、それが恣意的な理解ではないことをコーディングとの併用によって示してきたわけである。

また、二つの事例において筆者の感受認識は変化し、二つの事例の間の期間においても筆者の感受認識やワークショップに対する感じ方は変化してきている。共に取り組んでいる学生ボランティアとの関係も変わり、筆者の体験理解の視座自体が変化していった。こうした体験理解とは誰がいつ行なっても同じ理解に至るものではない。そうした視点の変化を信頼性の低さと捉

えるのではなく、人が継続的に何かを行なうということが必然的に内包する変化と生成の本質的特性と考え、その変化自体を対象化し、体験理解の重層的なプロセスに位置づける必要がある。それが実際に人がワークショップにかかわり続けていく中で行なっている体験理解であり、関与し続けていく中で生成的な体験理解の動態を捉え考察していくに適った方法と考える。

そこで本章ではワークショップの企画者、参加者、関与観察者である筆者の4ヶ月間の観察者視点の変化について考察を行なう。

2. 事例研究の概要

本事例研究では、先の二つの事例を含む、学生ボランティア19名と共同で企画実施した「子どもアート・カレッジ2012」の全7回のワークショップの実施過程を研究対象とする。同事業は筆者が事務局を務める芸術文化活動団体であるアート・コミュニケーション・デザイン主催の事業である。企画から講座7終了まで約4ヶ月間の期間がある。これまでもボランティア養成講座の参加者と共に数ヶ月かけてワークショップや子どもたちとの体験活動を行なってきたが、その多くは1日だけのイベントであり、数ヶ月に及ぶ場合でも経験豊かなボランティアや職業上での経験者も含めた構成員との実施であった。今回は初めて出会った大学3年生19名と初めての場所で行なう実践ということで、今までと同じように実践をつくり上げていけるかどうかは未知数であった。さらに記録や研究といった視点も持ちながら進めることは難しいと感じていた。そうしたいくばくかの不安も感じながら4ヶ月間の協働が始まった。

7回のワークショップにどのような気持ちで筆者は臨んだのか、企画準備段階や実施中、事後の振り返りの過程で感じたことや学生の声などの記録を基にした考察と、メモの記録を基にコーディング分析も行なった。それらの検討から学生とワークショップをつくっていく4ヶ月間の体験過程の中で、どのような感受認識の変化が筆者に起こっていたのかを明らかにしていく。本研究でもワークショップ参加者と同様の説明と事前了解、当日の再確認を得て倫理的配慮の上で学生と研究を進めた。

3. 子どもアート・カレッジ2012の概要

子どもアート・カレッジ2012は絵画、彫刻、絵本、ペーパークラフト、墨絵といった美術表現と、映像表現や人形劇などの演劇的要素も含んだ、幼児・児童とその親子のための七つの連続ワークショップである。活動タイトルと大まかな内容は助成金申請時に筆者が考案したが、助成決定後に学生ボランティアが改めて内容を考えて実施した。講座1の絵画表現ワークショップ以外は終了直後に学生との振り返りを行なうことができている。その際の内容や筆者の感じたことはメモに書き留めている。なお、講座7終了後に、講座7の学生とこれまでの4ヶ月間についての振り返りを行なっており、「追加の振り返り」としている。

4. 記述データ

7講座と「追加の振り返り」までの筆者の記述データを以下にまとめた。
なお、文中の「私」は筆者（笠原）である。

(1) 実施前段階

筆者はこれまでいくつものワークショップを企画実施してきたが、大抵はアーティストや専門家、地域で自主的に活動をしている個人や団体とのコラボレーションであった。企画してきたワークショップの研修会も指導者向けがほとんどだった。その点では初めて出会った学生と参加費をいただいて行なうワークショップを7回もできるのか、研究も併せてできるのか、正直なところ不安があった。しかし最初の説明会で全講座を企画から実施まで担当してみたいという積極的な声が学生から上がり、学生らの意欲を感じたことで、不安はあったもののやってみようという気持ちになった。ワークショップなどの協同的な実践では個々の力を越えたパワーが生みだされるということを経験的には理解しているが、躊躇する自分がいた。美術や造形が専門ではない学生とある程度の質を伴った活動をつくり出せるかどうか未だ未知数であり、自分の研究目的も達成できるかわからないという不安を抱いている状